基礎懇による八幡町内会のコンセプト

　　（２０１６年度「八幡町内会の将来像をどうするか。その基礎的検討」報告書より）

　三役の考え方により、毎年町内会用務の遂行が大きく変わる状況は好ましくなく、ある程度のよりどころとなる八幡町内会の共通な認識（コンセプト）を明確にする必要がある。

　町内会は、各種行政支援の他、防災、交流行事、福祉、敬老、子供会、伝統・祭礼、各種会議、区費徴収、会計等、多様な機能に期待する向きもある。

　しかし、三役は、住民から選出される以上、ほとんどの場合、行政経験の少ない人にならざるを得ない。さらに財政的にもボランティアにならざるを得ず、とてもこれらの多様な機能に対して、しかも１年間で細微にわたる対応までは困難であり、行政には各種行政支援の緩和をお願いすると同時に、住民は、できることは住民自身で行い、できる限り役員への負担を減らす町内会を目指す。

　町内会と行政の根本的な違いは、行政は法令を基に取り締まる性悪説にならざるを得ないが、町内会は人間の本性は善という性善説をとる。行政は法に基づき、町内会は情に基づく。

　社会一般は、金、物、効率、競争が求められ、精神的な余裕がない。

　家庭を基礎とする町内会は、それらの価値観をとぎほぐし、寛容でくつろげるコミュニティーが求められる。住み心地のよい郷土。

　行事、資金、役員用務のバランスが重要であり、みんなで協力し合う社会が望ましい。

　町内会のイメージの例えとして、快晴では日に焼けるが、そうかといって闇夜では不安。満月程度の明るさでいい。

　もし町内会がなければ、会費も支払わないでいい、役をしなくていい、その時は楽ではあるが、自分たちの長く住み続ける住みやすい郷土は生まれない。

　一方で、八幡町は、２つの土地区画整理事業により、転入者も増加し、１９７５年（昭和５０年）３６５世帯から、２０１５年には１２００世帯余りと、３倍以上になっている。

　従来から住んでいる世帯でも世代交代がすすみ生活様態も変化している。

　これらのように、転入者の増加や生活様態の変化から、住民の価値観も多様化している。

　住みよい町内会とするためには、多様化した住民の意向がなるべく反映され、多くの住民が町内会は必要と思えることが望ましい。

　一方、住みやすい郷土は、もとより隣接する他町内会の住民どうしの交流も有効である。気楽に往来できる関係が望ましい。

　町内会活動への参加は、個性及び各人の距離感を尊重し、ゆるやかで、各人ができる範囲での自由な参加が望ましい。

　一足先に区画整理事業で住民の増加した弥五郎嶋の経験を活かし、よりよいシステムを構築する。

＜当面の具体的な方針＞

行事

　ねらいを明確にして、効果的な運用を考える。

　住民どうしの交流等をねらった行事は、旗振り役が実行委員会などをつくって、自主的に運用することが望ましい。

資金

　経費は、住民から徴収した区費との認識を強く持ち、不要不急な出費は慎む。

役員の用務のスリム化

　次の役員が過重にならないことも考慮し、用務のスリム化を念頭に置く。

役員用務の分散化

　住民自らが当事者意識を持ち、なるべく多くの人に用務を少しずつ担ってもらい特定役員の用務の集中化を防ぐ。

役員の持ち回り

　役務的な用務については、組の持ち回りとするなど、全員参加とする。

　町内会参加のきっかけづくりにもなる。

＜町内会をイメージするキーワード＞

「住み心地のいい社会」、「町内会を身近に」、「価値観の多様性を認める」、「各人の距離感の尊重」、「自覚と寛容」、「みんなで」、「できる事をできる時に」、「コミュニティー（共同社会）醸成」、「一人はみんなのためにみんなは一人のために」